

# 余白

木村 咲

高い石段をゆっくり上がった。途中まで来て立ち止まり、上ってきた道を振り返って見おろす。

いつもこの辺りで振り返ったのを思い出し、まだ体力は落ちてないようね、と大きく息を吸い込んであたりを見回した。やはり昔とちっとも変わっていないのが嬉しかった。私が甘木町に住んでいたころは、この山を含めて丸山公園とっていたが、今は甘木公園というらしい。女学生のころは戦時中で、食料増産のために裏山の開墾に携わって鍬や鎌を抱えて上っていた。

石段の右側に、長い年月をそこに育った竹林が鬱蒼と茂っている。吹き上げてくる風にゆさぶられザワザワと騒ぎ、そして突然、コポーンと高い音を響かせる。この階段の上のほうに不揃いの石で作られた石段があり、その上に古い小さな社がある。その社になぜか近寄る気にな

れずに、そこで立ち止まってしまい、社に向かつて頭を下げ、左側を見渡した。

広がった田畑に煙が立ち昇っている。それは小さいころから見知った煙である。稲刈りの終わった田の中で稲わらを焼く煙だと祖母に聞いたことがあった。久しぶりに見たその煙に、なぜかほっと溜めていた息をはいた。やっと、一人になり肩の力を抜いて吐き出した吐息だった。

小学校一年生のとき担任になった先生は、女専を卒業してすぐの若い先生で、皆に優しく接してくださって、三年生まで担任だった。その後も地元にいた生徒たちと交流が続いていたようで、卒業後も交際があったらしい。私は、六年生のはじめに母の病で甘木町に引越しをし、

転校せずにバス通学をしていた。それは父が祖母の一人暮らしを心配してからのことだったのだろう。放課後になると受験のための居残り授業の人を目の端に見て祖母の家に走った。祖母も待ちかねていて、頂き物の柿とかさつまいもを風呂敷にいれてくれた。それらは母と私の食料不足を支えてくれていた。私は六年生のときも満足に勉強していない。昭和十六年十二月八日に太平洋戦争が始まり、生活は苦しくなるばかりだった。

母は脊椎カリエスで固いギプスの上で身動きできない状態で、父は戦争反対を叫んで、各地を演説して回っていて、めったに家に帰って来ない。頭山満氏や、中野正剛氏や清水芳太郎氏の提案する創生会をたちあげ、朝倉地方にも会員が集まっていた。家にはその人たちの額が束ねてあった。

介護のためには進学を止めるつもりでいたが、父母は進学しなさいとしきりに勧めた。それではと、家に近い甘木女学校に受験し、合格した。そのころは、頭がよくなくても入学できたようだ。制服や教科書も買ってもらい、早朝に起きて母の尿瓶の始末をし、寝床の横で一緒に食事をし、昼食を手の届くところにおいて、お寺の横のほそい近道を走って学校に行った。

そのころ、手伝いの若いお姉さんがやってきた。父の

知り合いで東京からだと聞いた。お姉さんは料理がうまく、どこからか魚や野菜を求めてきて母や私に食べさせてくれた。母はふっくらとなった頬を撫でながら、お姉さんにお礼を言っていた。

ところが胃が痛いと言いつ出した。そこで「お姉さん、お医者さんに来てもらって」とお願いして学校に走った。放課後帰ってみると、父もお姉さんも居なかった。母はいつものように「お帰り」と笑顔を見せた。

「母ちゃん、お腹の具合は？」

「大丈夫よ、お薬飲んだら治まったよ」

「お父さんもお姉さんも何処に行っとんなると」

「お姉さんは何を食べさせよんになると？」

「ちゃんと、いつものように、食べさせよんしゃるよ」

「ちよつと気になつてね」

「清子ちゃん、お姉さんは遠いところから来てやっとなさると。貴方が一人で東京に行ったら寂しいやろ。仲良くしてあげなさいよ」

「はい、分かりました」

そうした日が続いて十二月になり、元日に雑煮の汁をすすり、やせ衰えて母は逝った。

その日、私は固いギプスから母をだして、柔らかい布

団に寝かせてやろう、と父に頼んだが、父は首を横にふった。なぜだろう? と首をひねった。

そんなことを考えていたら、最後の同窓会のことを思い出した。

そのとき、また、コポーンと竹の音がした。

その日は、八十歳になろうとしている同窓生が、今年で最後にしようと思いい立って集まった日だった。そのころ女の子の組は三十数名だった。その中の十五名ほどが集まっていた。入院中の人も最後と聞いて出席。孫に送ってもらったという人、法事をすっぽかした人らが懐かしい幼顔をならべ、なにより先生の元氣さにみんな驚き、喜んだ。

私は『九州文学』の初めの方の三冊を送っていたので、先生からお祝いの金一封をいただいていたのを思い出し、お礼を言い、新聞に掲載されたものを手渡すと大変喜んでみんなに回し、同窓生も読みながらいろんなことを教えてくれた。

「清子ちゃんは、お父さんが新聞社をしよんなったけん、書くとは上手ばいね」と回し読みしながら言った。

「私がね、『あの道この道』を読みよったころ、清子ちゃんは『古事記』を読みよったばい」

「へえ、知らんじやった」

「忘れとるとたい」

皆で笑いながら、あれこれの話は尽きない。

「皆さん、元氣でね。また会いたいけど、今日は嬉しかったよ」と別れて丸山公園に上ってきたのだった。

その日のあれやこれを頭に畳み込んでいるうちに、ふと思い出した顔があった。

父は蹄鉄を生業にしていた。朝倉地方は農耕馬が多く農業も盛んだった。が、昭和十二年に日支事変が起こって馬は徴発されて中国（以前は支那といった）に送られ、働き手の主人たちも出征していった。当然父は職を失い、村役場や学校で始められた講演会や座談会に出席し、次第に思想を深めていった。

収入が途絶えた母は、頼まれものの着物を縫って祖母と私の生活を立てるために働いた。その苦勞の重ねは、母の命を三十五歳で奪ってしまった。その上、父は思想犯として当局に追われ、家宅搜索を受けるなどして熊本に拘置されてしまった。太平洋戦争に苦戦していた日本は、資源の多い南方に手を伸ばし、多くの若い人を亡くした。政府は国中に拘置していた思想犯を釈放し、その二泊三日のうちに各戦場にと送って軍人の補給をしたの

だが……。

一九二一年、太平洋戦争が始まった。その日のことを話していた同級生が居たことを思い出した。

その友の町は公園を出たところにあつた。確か、将校町と聞いた。軍隊関係の偉い人たちの住む町と聞いている。今は分らないが、その日の早朝に数人の軍人が町を囲んで警戒に当たり、子供たちはその人たちに連れられて登校した、と言っていた。その地域の横が男子学生が通う中学校である。

私は女学校三年生で大刀洗製作所に学徒動員された。

そして一年後の三月、飛行場が爆破され、その三日ほどあとに製作所も爆撃を受けた。

塗装場で飛行機の翼を塗っていた私は、赤トンボとは違う大型で金属の多い翼を塗るように職長に言われた。それは上手に塗ることができたと自分でも思った。そして職長に「この翼はなんとという飛行機か知っているか」と聞かれた。私はこうした機材に興味がなく、ただ「いえ」と答えた。すると「グラマンだよ、覚えておくんだよ」。私はただ、「はい」とだけ答えた。その飛行機は塗り終わると若い男性数人に抱えられて、ほかの場所に移された。

そうした毎日を繰り返しているうちに、飛行場が爆撃された。数日後、私たち七名はいつものとおり仕事始めのベルを待っていた。ところが二人、三人と工場に入ってきた大人たちが、自分の持ち物を抱えて出て行ってしまう。その様子を呆然と眺めていた私たちは「可笑しいよ、変だよ」と目配せしながら持ち物を抱えて、決められた守衛室に走った。ところが誰も居ない。それどころか鍵もかかっている。

空襲警報が鳴り出した。私たちはその守衛室しか知らない。工場内を見て回ることもしないし、まったく判らない。七人はその場でいらいらと足踏みしていると、東のほうから、

「こっちは開いとるよ、早く逃げなさい」

その男の声に七人は返事しながら走った。が、まったく知らない土地である。見回しても隠れられそうな場所もない。気付いたのは側溝だった。「あそこ……」口々に叫んで走り滑り込んだ。泥水に膝まで漬かっている。誰かが「お母さん」と泣き出し、またほかの人が「南無阿弥陀仏」と唱えている。飛行機は頭の上、すごい爆音だ。通り過ぎるのも速い。

水に浸かった体が寒い。「いまよ」、這い上がって見えたところに走った。そこは田の中に樹が茂っていた。樹

の下に屈みこんで激しく息を吸い、吐きだした。

また爆音が聞こえてきた、私の全財産である防空かばんを抱きながらそっと空を見上げると、キラリと光った。白金のような、美しい機体である。その機体からバットのような黒いものが一弾、二弾とつながって落ちてくる。

ズズーンと空気を裂くような地鳴りのような音と、地に落ちた物凄いい音と揺れ。中空では土と煙の中で器具が破裂して飛び上がっている。それらは空を覆い、ヒュルヒュルと落ちてくる破片が石か、私たちはその物を避けるように背を屈めていた。

そこに男先生が「誰か居らんか」「居らんか」と叫びながら近づいてきた。

「はーい先生、ここに居るよ、七人居るよ」

「よかった、無事だったか、帰りきるか」

「はい、同じ方向ですから」

帰り始めた。来たときの汽車は駅も含めて盛んに燃えている。

七人は朽ちた木のくぼみを教えたり、滑りそうなところを教えたりしながら甘木駅にたどりついた。

その日限りで学徒生活も女学校も終わり、卒業式も証書もなく、祖母の家に帰った。

竹林の中でコポーンと音がした。そうだ、帰らなくては。田んぼの中の煙もうすくなっている。

長居した石から立ち上がり、古いお宮に一礼して石段を降りた。

戦後一年ほどして無事に帰ってきた父は、北支の戦線に居たと言った。若い軍人たちは敗戦という悲惨な状態に迷い、自殺した人もあったと聞いた。父は身近な若い人たちを説得し、今後の日本のためにも君たちの力が必要だ、皆で日本に帰ろう、と人を集め、三、四人ずつ船に乗るよう指示し、最初に帰ってきたと言った。

その後も、博多港に船が着くと迎えに行き、我が家に連れ帰ってきた。港で家族の消息が分かった人は、別れて故郷に帰り、家族の在りかが分からない人は我が家に連れ帰ってきたのだった。

我が家は、たちまち大家族になった。

母の介護に東京からやってきていたお姉さんは、その後、私の母になっていた。父が出征して私が女学校を卒業する前に、弟を連れて実家に帰っていたが、父の帰宅を知って戻ってきた。弟は母が亡くなった年の十二月に生まれた。久しぶりの大きくなった弟を私は抱きしめて喜んだ。よちよち歩きの頃は「あねー、あねー」と私を

呼んで遊びをせがんでいたが、すっかり大きくなって、手を伸ばしてきた。忘れていなかったのが本当に嬉しかった。

父は、「自由になったんだ、言論の自由になったんだ」と、積極的に動き出した。私は父の手足となって動いた。

一階は印刷所と事務所。二階の半分は活字棚。その横に十二畳の部屋。その一部屋に何人の人が眠っていただろう。多いときは十人の大所帯で、三度の食事も大変だった。何しろ米の配給がない。復員してすぐの人の配給がないのだから。闇米は日々値上がりしていく。

すぐ裏が郵便局だったから、彼らはハガキを買って故郷や友人に発送していた。そのころはすぐに電話もつけてもらえなかった。

その中に岐阜の人がいた。お兄さんが居るから、とハガキを出しても連絡がなく、印刷所で形成の作業を手伝ったりして随分長く居たようだった。

その他に熊本市の人がいたがマリアの発熱で、私は大忙しになった。その人も叔父さんが居ると言っていたが、ようやく回復して安心したころ、叔父さんから連絡があった。彼はここで仕事の手伝いをしようか、などと言っていたのだが、にこにことお礼を言って帰っていった。

私は、広い部屋で一人になった。タバコの焼け焦げや、窓の掃除に、印刷の手伝いにと動き回ったが、一人になると寂しかった。父母は弟妹と下の小部屋にねむっている。

父は新聞発行に向けて全力を傾けた。元に戻るが戦前は、講演会などとは言わず演説会と言った。佐賀県で行われたとき、連れて行ってくれた。広い会場にぎっしりと人が集まっっていて、私は前のほうの席に着いた。会場を見回すと立っている人も多い。そして私のすぐ前に二人の警官が会場を見回しながら囁いている。誰かが開会の挨拶をし、父が演台に立った。私は緊張して体を固くしたが、不意に「注意」と警官の声がした。父はそれでも止めなかった。いっそう声を上げ、「この戦争は反対である」と。なにやら内閣の仕打ちがどうか、「物資不足の」とか、私にはまったく分らないことばかりだった。ただ警官の声が飛んでくるような気がして、ますます固くなっていた。そうした行動は当局の監視を強め、家宅搜索を受けたり、警察署に呼び出され、その後、熊本に拘置された。

父は私に言った。

「お父さんは、悪いことはしていない。人を殺したり、泥棒をしたわけではない。今の国の状態を正しい方向に



向かわせるために、皆の生活が安心して暮らせるようにしたいためだ」

そのころ日本中にたくさんの思想犯が拘置されていたそうだが、その人たちを全部釈放し、海外の戦場に送ったと聞いた。そして終戦。父は無事に帰ってきたが、たくさんの人が内外で亡くなった。

「自由になったんだ、言論の自由になったんだ。新聞を発行して日本の改革に力を発揮するんだ」

父は記者を募った。戦後復員した若い男性が二人、三人と応募。そして印刷工や文選工、事務の女の子、いろんな人が応募してきたが、印刷機がない。戦前からの思想的同志からも援助を受けながら、ようやく印刷機が見つかった。それは、今にも解体しそうなトラックで運ばれてきた。トラックだけではなく、印刷機も擦り切れているような古いものだった。父と印刷工は額をよせ、「使えるかな」、「はい、なんとかやってみましょう」。その人は遅くまで機械を試していたが、ブルブルブルと震えだして紙さし板の音が響いて一安心。

文選工も見つかり、機械工も機械の点検に汗と機械油にまみれ、記者五人、何とか態勢が整って、「県政新聞」一号が発行された。

新聞は各地方に配られ、評判を呼んだ。配送の準備、文選工の見習い、食事の用意、走り使い、掃除などなど、一日中動き回った。

一九五〇年、レッドページの枠に入れられた父は、「県政新聞」の発行者としての氏名を消さなければならなくなった。そこに注目されたのが新聞社の斜め向かいにある警察署の署長、永露清一郎氏だった。永露氏の氏名を使わせてもらった。

永露氏は朝倉市の平塚に多く、私もその一人だが、集落の一部を除いてその姓だと聞いた。最近も同姓の家族が集まって、先祖供養がされているらしい。散在していた墓地を一箇所に集め、共同墓地が造られている。

私は甘木町からタクシーを頼んで、平塚の墓地に行つた。すると運転手さんが、「平塚は今も先祖供養をされていますね」と聞いたときは嬉しかった。なぜなら父も母も祖母も清一郎さんもその墓地に居るからだ。

中に入ると、知った名前がずらりと並んで私を見ているようである。「今日は、おじさん、おばさん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃん、私は元気よ。私も此処に来よかな」と一人でしゃべって、待たせた車に。

甘木バス停から博多駅行きに乗るとすぐ左側に、父が

---

---

私が走り廻っていた家が見える。

もう来ることもないだろう。皆さんお元気で。

九十二歳になった私の心の余白に、しばしば出てくる  
思い出である。